

特別史跡大坂城跡下層に想定される古代の遺跡

佐藤 隆

要旨 特別史跡大坂城跡に指定されている徳川期再建大坂城の地下には、慶長20年（1615）の大坂夏の陣で焼亡した豊臣期大坂城があり、さらにその下位には大坂本願寺の中枢部があったと推定されている。本稿では、この地区の南半部から出土している5～7世紀の土器をもとに、上町台地の最北端に位置して大阪市内で最も標高の高い地点であるこの地区が、古代からいち早く開発され、5世紀の法円坂倉庫群や7世紀の前期難波宮の時期においても権力の中核となる施設がおかれていた可能性が高いことを指摘した。

はじめに

現在の大坂城公園の大半を占める徳川期再建大坂城の本丸・二の丸・西の丸を含む範囲は特別史跡大坂城跡に指定されている。ここは大阪を南北に貫く上町台地の最北端に当たり、大阪市内で最も標高の高い地点である。この特別史跡大坂城跡の地下には、豊臣秀吉（当時は羽柴）が築いた豊臣期大坂城があり、慶長20年（1615）の大坂夏の陣で焼亡した後、徳川期大坂城の再建時に厚い盛土によって埋め込まれている。また、さらにその下位には大坂本願寺の中枢部があったと推定されており、筆者も出土土器からその可能性に言及したことがある〔佐藤2008〕。

現在まで、この周辺におけるより古い時代の遺構・遺物に関する考古学的な成果についてはほとんど検討されてこなかった。特別史跡に指定されていることから、新たな施設の建設や配管の埋設などの工事に際しても厳しい制約を受けており、発掘調査の機会そのものが少ないこともその大きな要因である。現在の本丸と二の丸とをつなぐ桜土橋付近で段丘構成層（いわゆる地山層）の標高が上町台地で最も高いこと、古代と考えられる4基の柱穴が検出されていることなど、わずかな事実が報告されているにすぎない。

本稿では、特別史跡大坂城跡においてこれまで行なわれた発掘調査で得られた古代の遺跡に関する成果を再整理することで、上町台地最北端に位置するこの地区の歴史的重要性について検討する。

1. 特別史跡大坂城跡で出土した古代の土器

今回検討の対象とするのは、おもに OS80-1・2次調査（「OS」は「大坂城跡」、「80-」は1980年度の略称、以下も同様）および OS84-17次調査の成果である（図1）。

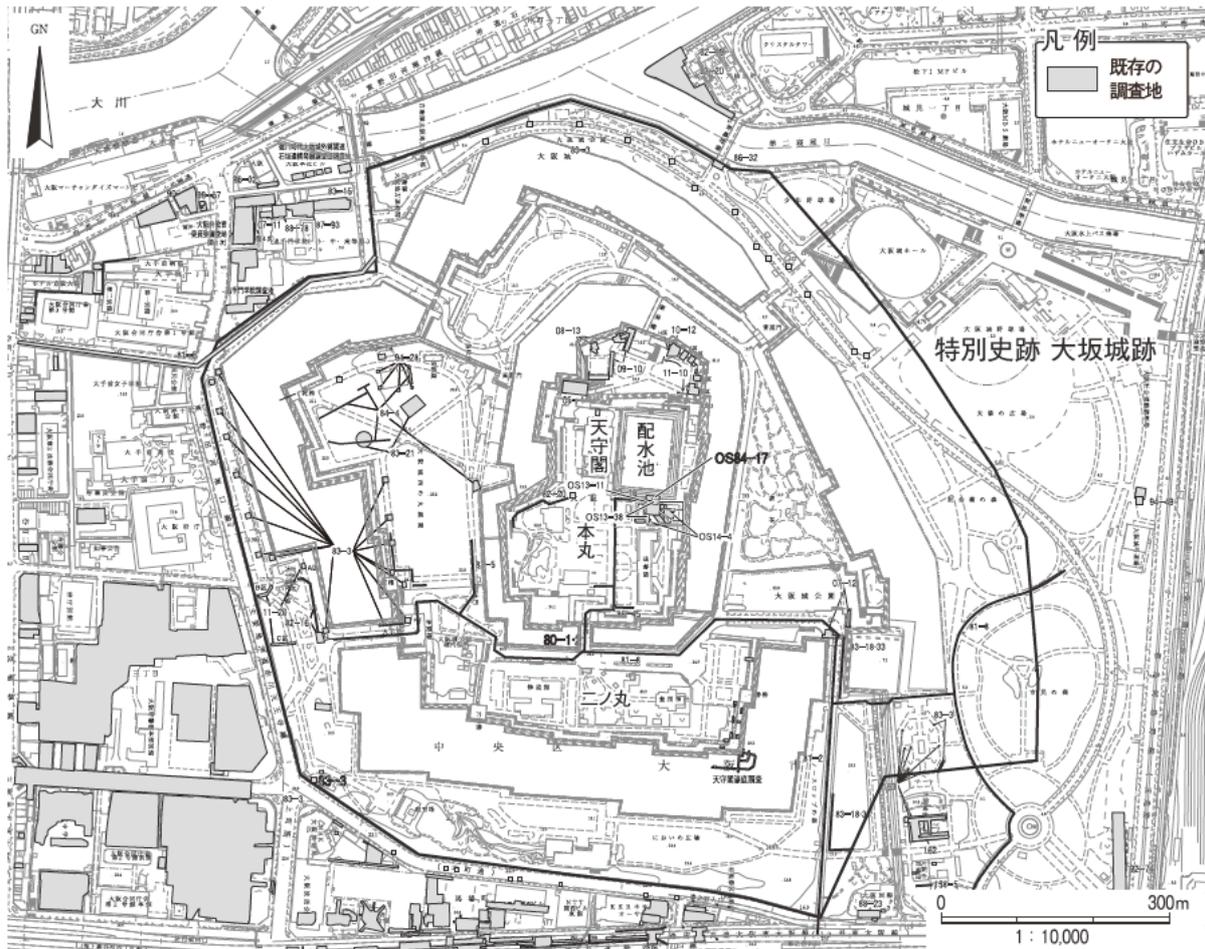
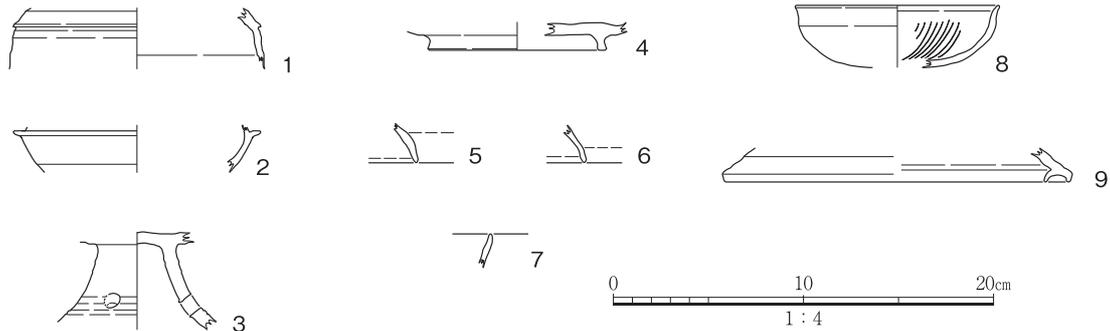


図1 特別史跡大坂城跡とその周辺の調査地 (大阪文化財研究所提供)

1) OS80-1・2次調査

現大阪城南部の本丸および二の丸から大手前に至る埋設管工事に伴う発掘調査である。桜土橋南側地点において、段丘構成層の上面で4基の柱穴が検出されるとともに、その上位の地層から古代の土器が出土している。発掘調査報告書〔大文協2002〕ではこの地層は「6～8世紀代の遺物を含む暗褐色粘質土を主体とする整地層」という記述のみで、段丘構成層の上面で検出した柱穴の検出位置図はあるが、出土遺物は図化されていない。今回あらためて出土遺物を実見したところ、土師器は図化不可能な細片のみであったが、須恵器には図化できる破片が含まれていた(図2-1～7)。1は杯蓋(奈良文化財研究所分類の杯H蓋、以下の分類名称は同様)である。細片で口縁部径は正確には計測できないが13cm前後である。天井部の稜は明瞭に突出しており、回転ケズリの範囲も広い。筆者による陶器窯跡編年の陶器Ⅱ新段階〔佐藤2007〕より遡る可能性があり(同段階より古い時期の編年は未成稿)、田辺昭三氏のTK208型式～TK23型式〔田辺1981〕に位置づけられる。2は杯Hで口縁部と底部とを欠く。細片で受部径は正確には計測できないがこれも13cm前後である。体部下半が丸みを持ち、器壁が薄いことから、田辺氏によるTK208型式前後と考えられる。これら2点の暦年代は5世紀後半と考えられる。3は短脚高杯の脚部である。透かし孔は円形で、3箇所にあったとみられる。こうした短脚の高杯は6世紀前半に降る可能性もあるが、多くは5世紀後半から6世紀初頭に見られ



1～7：OS80-1次調査、8・9：OS84-17次調査

図2 特別史跡大坂城跡出土土器（筆者実測）

る器形である。

4は杯Bで、高台の位置が底部外縁よりかなり内側に付く。筆者の難波地域の編年（以下、難波編年〔佐藤2000・2014〕）では、前期難波宮が造営された難波Ⅲ中段階から、降っても同Ⅳ古段階までにおさまる。暦年代は7世紀中頃から後半にかけてと考えられる。5～7はいずれも細片で口縁部径の計測が難しいが、形態から5・6は杯H蓋、7は杯Gと考えられ、口縁部径も10cm前後からそれほど大きくは隔たらないであろう。暦年代は7世紀中頃以降である可能性が高い。

調査原図とともに保管されていた当時のメモには「暗茶褐色粘質土は、5～8世紀に属する土師器・須恵器を包含している」と記載がある。調査日誌にも5世紀に遡ると思われる遺物があると記されているが、何故か報告書〔大文協2002〕では年代の理解が変更されている。遺物の下限が8世紀と記されているのは、当時は7世紀に遡る杯Bの特徴がまだ十分に把握されていなかったことによるのではないかと考えている。現在の桜土橋南詰めの現地表はやや高低差があるが、その1点の標高がTP+26.2mであり（大阪市がインターネット公開している「マップナビおおさか」による）、この土器を含む地層は現地表からおおよそ0.9～1.3mの高さで検出されている。その下位にある段丘構成層上面の標高はTP+25.0m前後である¹。

これらの土器を包含した地層の性格や形成過程は、限られた調査区での所見なので速断はできないものの、調査当時は南方の宮殿中心部と同様の地層であると捉えられている²。したがって、古代におけるこの周辺は森林が広がるような環境であったとは考えにくい。今回紹介した土器が周辺の標高の低い地点から遠く運ばれた後に埋没したものでなければ、この地区の近辺で土器を使用する営みがあったことになる。

②OS84-17次調査

現在の大手前配水池の南側において水道管改良工事に伴って行なわれ、豊臣期の詰の丸石垣を検出したことで重要な成果を得た発掘調査である。この調査においても報告書〔大文協2002〕では図化されていないが、古代の土器が出土している（図2-8・9）。8は土師器杯Cで、難波編年における難波Ⅲ中段階におおむね相当して7世紀中頃のものと考えられる。土器の注記は「ウラゴメ区東部Z面清掃中」とあり、「ウラゴメ区東部」は調査原図を見ると豊臣期詰の丸石垣から東の調査区である。

この土器の出土日は、調査日誌によれば大坂夏の陣で被災した遺構面を調査している時期に当たり、「Z面」はこの遺構面（豊臣期大坂城中の段における生活面）を示すと考えられる。9は須恵器の杯あるいは杯蓋の口縁部である。細片で正確な口縁部径は計測できないが18cmほどに復元できると考えられ、杯H身ではなく杯B蓋と判断した。かえりはあまり退化しておらず、この形式では比較的古い特徴をもつ。難波Ⅲ中～新段階の可能性がある。「SP-224」から出土している。8と同じ遺構面で検出された柱穴か小穴のうちの1つである。これら2点の土器は豊臣期の遺構や地層から出土しており遊離資料ではあるが、整地に用いられた土砂が付近からもたらされたもの（例えば、本丸と二の丸間の堀の掘削など）であれば、やはり古代の遺跡がこの地区に存在したことを示す資料になると考えられる。

以上の事実を手がかりにすると、遺構としては難波宮下層遺跡のものとされる規模の小さな柱穴しか現在のところでは見つかっていないものの、上町台地の北端部で、かつ最も標高の高いこの地区が5世紀の段階から開発され、7世紀の前期難波宮の段階においても人々が活動する場であった可能性は高いと考えられる。

2. 想定される古代の施設

1) 従来の学説の検討

それでは、この地点にはどのような施設があったのかについて検討してみよう。研究史のなかで特別史跡大坂城跡の下層にある古代の施設について言及した説としては、次の3つの説を挙げることができよう。

①山尾幸久氏の難波長柄豊碕宮説

山尾幸久氏は、前期難波宮を難波長柄豊碕宮と考える説に否定的な立場をとり、前期難波宮は天武朝の宮殿で、長柄豊碕宮は現大阪城の下層にあったのではないとする〔山尾2006・2007〕。

前期難波宮の造営については、古地形の復元と土器の編年研究との関係から、難波Ⅲ中段階〔佐藤2000〕から周辺の谷の埋め立てが始まることがわかっている〔寺井2003・2007〕（図3）。その成果から、現在の中央区法円坂を中心にできるだけ平坦地を広く確保できる一帯が選地され、前期難波宮の中枢部がおかれたことは明らかである。前期難波宮が天武朝の遺構であるなら、こうした整地の開始時期と整合しない。また、今回提示した図2-4・9の杯Bおよび同蓋は、これまでの出土例からみれば難波Ⅲ中段階がもつ年代幅のある段階か、あるいはⅢ新段階から現れていると考えられる〔佐藤2014〕。この地区の土器は、前期難波宮造営のために集落が廃絶し、周囲の谷を埋め立て始めた時期の土器と比べてむしろ新しい要素をもち、前期難波宮より古いものとは言えない。したがって、山尾氏の説は可能性が低いと考える。

②吉川真司氏の小郡宮説

吉川真司氏は、孝徳朝における宮殿が小郡宮に続いて長柄豊碕宮と2段階で造営されたと考え〔吉川1997〕、小郡宮の位置を現大阪城北半部の傾斜地に推定している（図4）。その位置とはややずれがあるが、今回検討している地区に小郡宮が存在した可能性は検討しておく必要がある。

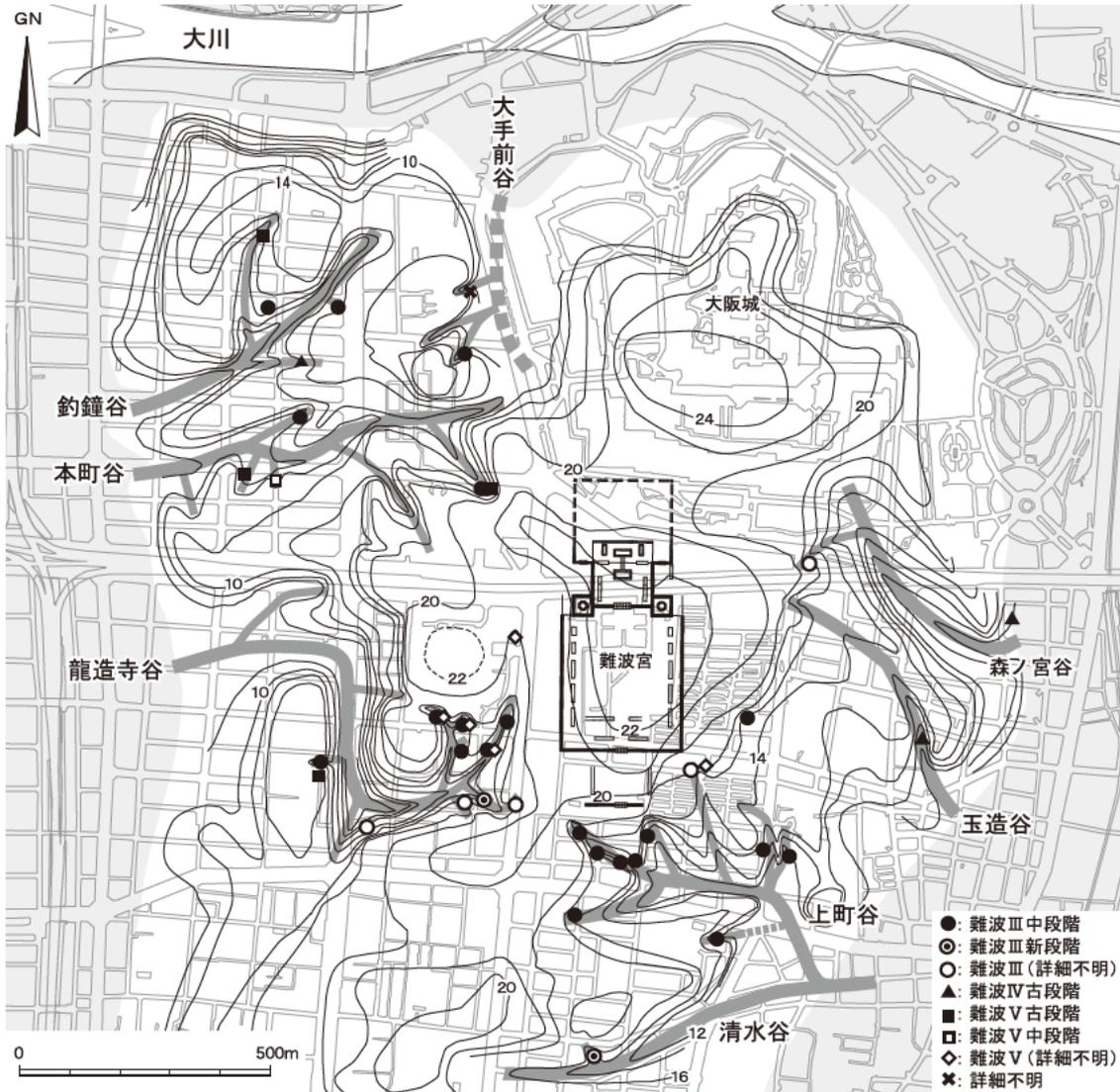


図3 難波宮周辺の地形と整地の時期（〔寺井2007〕を改変）

吉川氏がこの北斜面地に小郡宮があったことを推定したのは、正倉院文書の「摂津国家地売買公驗案」の家地が当時は東生（成）郡と西生（成）郡とにまたがっていると認識されており、文書に記載されている「東小郡前西谷」という位置関係を、東生郡と西生郡との郡界を難波宮中軸線とする大谷治孝氏の説〔大谷1979・1988〕とあわせて検討した結果による。大谷氏は、岸俊男氏が西郡→西城郡→西成郡→西生郡という転化を想定し、「城」が「都城」に通ずる可能性を指摘した説〔岸1977〕なども引用して考察している。しかし、東生郡・西生郡の郡界が難波宮の中軸線によるものであったと推定できる考古学的根拠はまったく存在しない。郡界を決めるにあたって明確な基準になると考えられたのは、1970～80年代においては、まだ見つかってはいないものの難波京朱雀大路が上町台地を南北に貫いた形で存在したと信じられていたことによるのであろう。現在までの発掘調査の成果をみるかぎり、断片的には大路の痕跡かとされる遺構も見られるとはいえ〔大文研2015〕、想定されてきたような大路の存在に対しては否定的な見解が示されている〔高橋2007〕。吉川氏による小郡宮の位置推定も東生郡と西生郡の郡界が難波宮中軸線であることが前提になっており、また、古代においては



基図：国土地理院発行 1:25000地形図「大阪東北部」

- 1 前期難波宮(方740m説) 2 難波宮朝堂院 3 内裏東方遺跡 4 内裏西方倉庫群
5 「朱雀門」 6 大坂城本丸 7 大坂城西の丸 8 小郡宮推定地 9 「摺津国家地売買
公驗案」家地推定地 10 石町(大郡宮推定地) 11 高麗橋(難波津推定地)

図4 吉川真司氏による小郡宮推定位置（〔吉川1997〕より）

り成立しうる可能性は残る。この点は後述する。

③積山洋氏の園林説

積山洋氏は、中国や朝鮮の都城にならってわが国でも園林（禁苑）がおかれ、現在確認できる飛鳥の苑地遺構が最古と言われているが、難波宮ではさらに遡る孝徳朝でそうした施設があったと考えている〔積山2013〕。その根拠は、府警本部建替えに先立って大阪府文化財センターが調査した本町通以北に広がる谷（図3の「本町谷」）における自然科学分析によって復元される自然環境や、各地から搬入されて谷に放置された石材、大阪府庁周辺の発掘調査ならびに大阪合同庁舎1号館建設の際に得られた成果などである。こうした知見と、『日本書紀』の孝徳即位前紀における「断生国魂社樹之類是也」とを結び付けて、「府庁付近から現大阪城の一带」が孝徳朝の頃は生国魂社の神域で、樹木が茂る杜であったという景観を復元している。これが禁苑に取り込まれたという発想である。積山氏が根拠として挙げている、府庁周辺における前期難波宮期の遺構・遺物の希薄さについては、もともと「本町谷」は前期から後期を通じて難波宮期には埋め立てや整地がごく一部でしか行なわれておらず、宮域外であったので当然の結果である。また、台地部では遺構が希薄であったとしても、谷部からは当該期の土器などの出土遺物が多数報告されている〔大府センター2002〕。そのいくつかは古墳時代後期と報告されている鍛冶工房〔新海2002〕の基盤層である10層やその周辺にも見られる（図5）。

大川と旧大和川の合流地点に近く、土地条件の良くなかったところであることを考え合わせると、その可能性は低いと言える。こうした不安定な位置推定にもかかわらず、なかば定説のごとく無批判に引用した論考も見られた〔古内2012、市2014〕が、最近ようやく西本昌弘氏によって否定的な見解が出された〔西本2014〕。

①の検討で述べたように、図2-4・9のような須恵器杯Bは、現在のところ難波Ⅲ中段階から新段階にかけてのある時点から現れるとみられる。仮にこの地区に想定する遺跡を小郡宮とすれば、こうしたやや後出する土器と年代が整合しない。ただし、小郡宮をその後には造営される前期難波宮との連続性のなかで考えた場合にかぎ

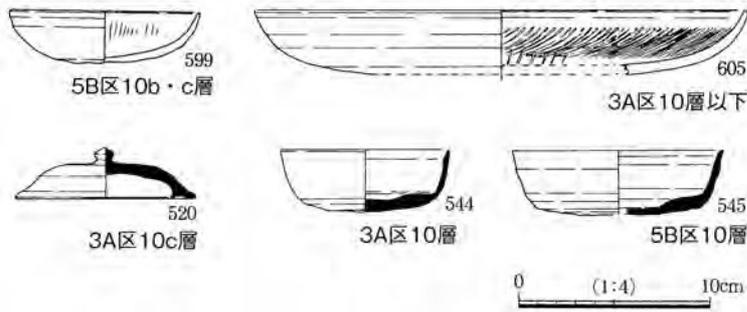


図5 鍛冶工房基盤層から出土した7世紀の土器
 ([大府センター2002] から抜粋、編集)

詳細な検討は別の機会とするが、この工場の年代は前期難波宮の時期まで降る可能性が高いと筆者は考えている。また、本稿で取り上げた大坂城本丸・二の丸南部下層が5世紀の段階ですでに開発されていたのであれば、『日本書紀』孝徳即位前紀の記載は別の一帯について述べられたものと言わざる

をえない。

こうしてみると、中尾芳治氏は当時の植生が原始林に近いという合同庁舎1号館建設工事における分析の所見から、生国魂社の森を想定している〔中尾1992〕が、その範囲は限定されたものと考えられ、現大阪城のほぼ全域を含むと推定する考古学的根拠は皆無である。したがって、漠然と生国魂社の森が広がっていたという積山氏の想定は再考する必要がある。ただし、中世の段階では大坂本願寺の寺内町に近接して生国魂社があったことは明らかであり、『二条宴乗記』には「生玉口」の記載がみられる〔仁木1997〕。また、豊臣期大坂城の「大手口」は「生玉口」とも呼ばれたらしい〔櫻井1970〕ので、生国魂社は寺内町の中でも西寄りの部分にあったと推定できる。発掘調査の成果でも関連しそうな資料が見られる。中村博司氏は、府庁周辺の発掘調査で出土した豊臣期の「生玉観音院」墨書木製品を紹介し、生国魂社の神宮寺である法安寺の子院である観音院が付近に位置したとすると、生国魂社も現大阪城の西、大手前一带にあった可能性が高いと述べている〔中村2008 pp.19-20〕。大阪歴史博物館・NHK大阪放送会館の敷地における発掘調査では、梵字文軒丸瓦（ウーン）や独鉗杵文軒平瓦といった密教との関連を示す遺物が出土しており（図6〔大市協2000〕）、これら以外にも関連しそうな資料は散見される。管見では、豊臣前期より古い特徴をもつ大坂本願寺末期の陶磁器・

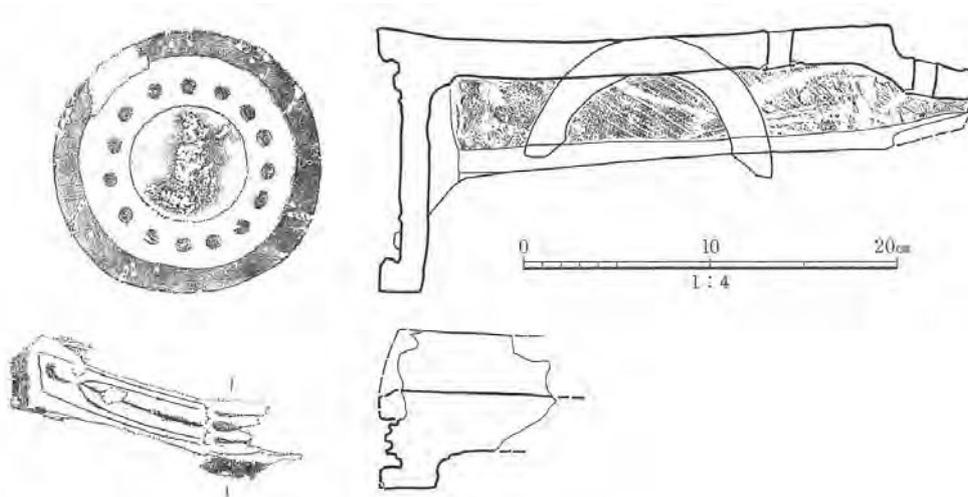


図6 梵字文軒丸瓦・独鉗杵文軒平瓦（〔大市協2000〕より）

土器が出土する調査地点は現大阪城の西側に偏在する傾向がある。今後、それらの関係は注目していくべきであろう。

2) 想定される遺跡

これまでみてきたように、現大阪城の一角が古代においてどのように利用されてきたのかについて、従前の説には問題があって従えない。以下に筆者の考えを示そう。

今回報告した土器によって遡りうる5世紀の段階においては、注目される調査成果として法円坂の大倉庫群がある〔大文協1992〕。その規模から王権に関わる施設と評価されている。しかし、その管理を行なう施設については、付近で古代の宮殿遺跡である難波宮跡の発掘調査が広い範囲で行なわれているにもかかわらず、そういった遺構はこれまでの発掘調査で見つかっていない。前期難波宮の内裏南門や後期難波宮の大極殿・大極殿後殿が重なる、難波宮では最も中枢に位置する地区にもなく、5世紀代の遺構は須恵器の窯が見つかったのみである〔大文協1995〕。消去法で考えると、5世紀における管理施設（あるいは「王宮」と呼ぶべきもの）がおかれたとすれば、今回検討している大坂城本丸・二の丸南部の、上町台地において最も標高の高い地区しかありえないと言える。

それから、今回提示できたわずかな土器片からこの地区におけるすべての歴史的動向を語ることはできないとしても、7世紀の前期難波宮の時期にも何らかの開発があったことは考えて良いであろう。この段階では、朝堂院を置いた平坦地を中心に周辺の谷を埋め立てる大規模な土木事業を行なっているが、それでも多くの部分は埋め切れていない。その埋め立てや整地は後期難波宮の段階で再度行なわれている谷もあり、また、この時期に新たに埋め立てが始められたところも見られる。

このように、前期難波宮の段階では中枢部の周辺であってもまだ整地が完全ではなかったと考えられる。前期難波宮の内裏北半部と現在推定されている現大阪城の南外堀周辺は、発掘調査の機会が少

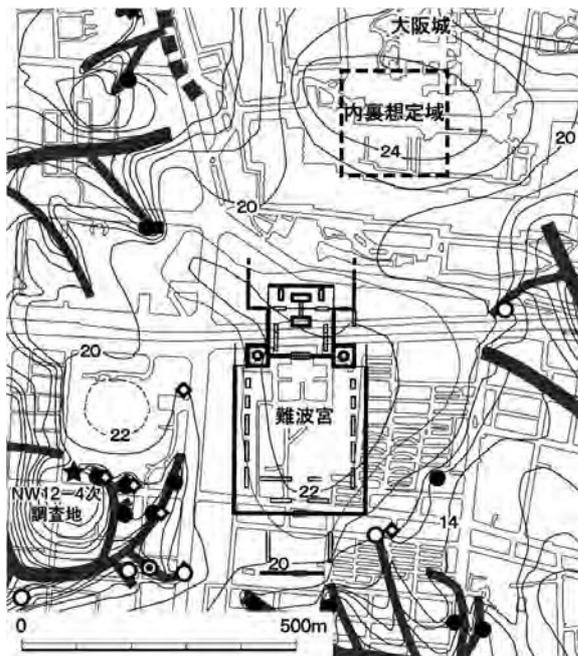


図7 前期難波宮の内裏想定域

ないこともあって建物配置などが何もわかっていないが、大阪城公園西南隅のOS83-3次調査地では桜土橋南詰の最高所からおよそ6mも低い標高で後期難波宮の重圈文軒平瓦（6572型式D種とみられる）を含む整地層が見つかった〔大文協2002〕。この付近は前期難波宮の段階にはまだ低いままであったことがわかる。前期の内裏南半部の内裏前殿-後殿が、後続する宮殿の大極殿-後殿の要素をもち始めた儀式空間であったとすれば、その北には大王が居住する私的な性格をもった建物がおかれたはずである。そこが周囲より低くて整地もされていなかったとすれば、そうした施設がおかれた可能性は低い³。その代替となる場所は、本稿で取り上げた大坂城本丸・二の丸南

部であろう。むしろ5世紀から開かれた大阪で最も条件の良い地区にこうした施設がおかれたのは当然のことかもしれない。その規模については手がかりがないので、すでに明らかである東西幅と同様に南北の規模も約185mと想定し、前掲の図3を利用して推定域を示しておく(図7)。

先に否定的な見解を示した小郡宮説については、「摂津国家地売買公驗案」をもとにした吉川氏の推定地点とは異なるが、もとの小郡が最も土地条件が良く、かつ5世紀以来権力の中核がおかれた地区に営まれていたとすれば、それをいち早く宮殿に改造して利用し、続く前期難波宮の造営にあたって内裏の一部として取り込んだ可能性は完全には否定できない。これは直木幸次郎氏や吉川氏の2段階造営論〔直木1977、吉川1997〕とは異なる発想である。ただし、8世紀に編纂された『日本書紀』の記載と、実際の遺構・遺物との対応を議論するには、もう少し資料の増加を待って慎重に進める研究の姿勢が必要なので、これ以上は踏み込まない⁴。

上述のように前期難波宮の造営にあたっては、上町台地のなかで最も有効に広い平坦面を確保できるところを中心にして整地を行なっているが、大きな落込みは埋めきれていない。谷部を避けて周辺の平坦面にも施設を分けて配置している。近年、宮域西方で見つかったNW12-4次調査の建物群(図7の★印の地点〔大文研2013b〕)は、報文のとおり前期難波宮のものであればそうした一例である。今回取り上げた地区も、内裏の北半部とされてきたところの地形条件の悪さから考えると、北東へ突出するかたちで宮殿として重要な部分がおかれた可能性は充分にある。他地域の宮殿の事例でも、たとえば長岡宮では、造営の事情は異なるかもしれないが、地形条件の悪い大極殿院の北を避けて、丘陵をひな壇造成した際の最高所である宮域西部に第一次内裏(西宮)をおいたとする考えがある〔國下・中塚2003、國下2007・2011〕。今回の想定が妥当であるとするれば、最高所に内裏(大王=天皇の御在所)をおき、大極殿院・朝堂院といった中枢部分のために最も広い平坦面を確保するといった点も造営過程としては共通していると考えられる。

むすびにかえて

以上、わずかな土器や断片的な地層の情報を手がかりに推論を進めてきた。特別史跡で発掘調査を行なう機会は限られており、得られた資料がたとえ断片的なものであっても、それらを最大限に活用して論を構築していくべきであろう。そのためには、まずは資料の共有化が不可欠であり、今回のように報告書で取り上げられなかった資料を“再発掘”して公表していくことも意味のある作業ではないかと考えている。

本稿で取り上げた特別史跡大坂城跡は、中世に大坂本願寺が本坊や寺内町をおき、その上に豊臣秀吉が大坂城を築き、またその上を完全に覆うかたちで徳川氏大坂城がある。この場所の歴史的重層性は現在では広く認識されていると考える。全国的な(少なくとも広域的な)視野をもって、大阪の地を中心に権力を展開しようとする者にとって、この地区はまさにシンボルとも言える場所であったのではないか。そういう意味では、近代における再建天守閣や第四師団司令部もそれに加えて良いであろう。しかし、これらの遺構のさらに下層に想定される古代の遺跡は、その立地が上町台地の最高所であるという好条件にもかかわらず、あまりにも過小評価されてきた。

今回、こうした問題提議を行なうことによって、厳しい制約があるとはいえ、発掘調査が行なわれる際には下層の遺跡の有無についても問題意識をもって追究できる機会が生まれるのではないかと期待している。本稿がその一助になれば幸いである⁵。

註

- (1) 「TP+25.6m前後」という報告書の記載〔大文協2002〕もあるが、少し高すぎる。近年に特別史跡西半の層序が検討された際の、桜土橋付近における段丘構成層の最高所は TP+25m弱という見解〔大文研2013a〕は本稿とほぼ同じである。
- (2) 報告書〔大文協2002〕には「地山の上には大坂城築城に係わる整地層が堆積」「柱穴の上位には江戸時代の整地層が堆積」という記述がある。明らかにそういう箇所も見られるが、本稿で着目した「暗（茶）褐色粘質土」については、古代の地層と酷似するという調査当時の所見が残されている。陶磁器をまったく含まない箇所がある。
- (3) 李陽浩氏の前期難波宮内裏の復元〔李2015〕は、数字としては整然としてわかりやすいが、本稿で述べたように地形も含めて考えると現実的ではないところもある。宮域の北限としている大阪府文化財センター調査地の柱穴列190〔大府センター2006〕についても、柱材の年代は再検討が試みられているとはいえ、遺構としては前期難波宮の造営段階に遡りえないのは確実である。仮に北限ラインとしての意識があったとしても、宮域が地形条件の制約を強く受けているとすれば、それが上町台地の最高所にまで及んだとは考えられない。また、後期難波宮では宮域の南限ラインを変えずに、内裏を条件の良い南方へずらして配置したように見える。以前にも指摘したとおり〔佐藤2010〕、朝堂を8堂とした最大の要因は地形の制約であると考えられ、これを根拠として後期難波宮が副都であるとすることはとらない。
- (4) 大郡宮も、孝徳紀においては主要な宮殿の1つとみられる〔吉田1982、門脇1991〕が、考古学的成果との関係は今のところ明らかではない。
- (5) 今回の想定が正しければ、前期難波宮の内裏前殿－後殿は内裏からは離れて、朝堂院に近い形で配置されたことになる。従来の評価よりも後世の大極殿－後殿の性格を強く帯びると理解できる可能性がある。今後の調査成果に期待したい。

【引用・参考文献】

- 市大樹2014、「難波長柄豊碕宮の造営過程」武田佐知子編『交錯する知－衣装・信仰・女性－』思文閣出版、85-303
- 大阪市文化財協会1995、『難波宮址の研究』第十
2000、『難波宮址の研究』第十一
2002、『大坂城跡』VI
2013a、『大坂城跡』XVI
2013b、『難波宮址の研究』第十九
2015、『中央区上町一丁目24-23他における建設工事に伴う難波宮跡・大坂城跡発掘調査（NW14-3）報告書』
- 大阪府文化財センター2002、『大坂城跡発掘調査報告』I 本文編
2006、『大坂城址』III
- 大谷治孝1979、「『摂津国家地売買公驗案』の基礎的考察」『ヒストリア』第82号、大阪歴史学会、12-30
- 1988、「南摂四郡の郡境と難波京」直木孝次郎先生古稀記念会編『古代史論集』上、塙書房、375-398
- 門脇禎二1991、「いわゆる、『難波遷都』について」『「大化改新」史論』下巻、思文閣出版、3-18（初出1972）
- 岸俊男1977、「難波の都城・宮室」難波宮址を守る会編『難波宮と日本古代国家』塙書房、137-182

- 國下多美樹2007、「長岡宮城と二つの内裏」『古代文化』第59巻第3号、古代学協会、1-21
- 2011、「長岡宮朝堂院西方官衙の性格～複廊遺構の評価をめぐって～」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第91集 長岡宮推定「西宮」、向日市埋蔵文化財センター、101-118
- 國下多美樹・中塚良2003、「長岡宮の地形と造営～丘と水の都～」『年報 都城』14、向日市埋蔵文化財センター、53-88
- 櫻井成廣1970、『豊臣秀吉の居城 大阪城編』、日本城郭資料館出版会
- 佐藤隆2000、「古代難波地域の土器様相とその史的背景」『難波宮址の研究』第十一、大阪市文化財協会、253-265
- 2007、「6世紀における須恵器大型化の諸様相－陶邑窯跡編年の再構築に向けて・その3－」『大阪歴史博物館研究紀要』第6号、大阪市文化財協会、25-48
- 2008、「大坂本願寺推定に関する考古学資料－特別史跡大坂城跡における発掘調査成果から－」『大阪歴史博物館研究紀要』第7号、大阪市文化財協会、31-44
- 2010、「後期難波宮の造営過程と“副都説”の再検討－奈良時代都城における新たな位置づけのために－」『条里制・古代都市研究』第25号、条里制・古代都市研究会、24-41
- 2014、「難波地域の土器編年からみた難波宮の造営年代」『難波宮と都城制』、吉川弘文館、78-99
- 新海正博2002、「古代の鉄器生産遺構」『大坂城跡発掘調査報告』Ⅰ 自然科学・考察編、大阪府文化財センター、307-317
- 積山洋2013、「初期難波京の造営」『古代の都城と東アジア』、清文堂、244-248
- 高橋工2007、「細工谷遺跡周辺の古代における谷の開発について」『細工谷遺跡発掘調査報告』Ⅱ、大阪市文化財協会、61-68
- 田辺昭三1981、『須恵器大成』角川書店
- 寺井誠2003、「前期難波宮南方の土器群と開発」『大阪歴史博物館研究紀要』第2号、大阪市文化財協会、83-88
- 2007、「孝徳朝における古代難波の都市建造とその後」『日本考古学協会第73回総会 研究発表要旨』、80-81
- 直木孝次郎1977、「難波小郡宮と長柄豊碕宮」難波宮址を守る会編『難波宮と日本古代国家』、塙書房、41-78（1994一部改稿「孝徳朝の難波宮－小郡宮を中心に－」『難波宮と難波津の研究』、吉川弘文館、72-101）
- 中尾芳治1992、「難波宮発掘」『古代を考える 難波』、吉川弘文館、120-169
- 中村博司2008、『天下統一の城・大坂城』シリーズ「遺跡を学ぶ」043、新泉社
- 仁木宏1997、『『二条宴乗記』に見える大坂石山寺内町とその周辺－「石山合戦」開戦時を中心に－』『人文研究 大阪市立大学文学部紀要』第49巻第6分冊、62-97
- 西本昌弘2014、「改新政府と難波大郡宮・小郡宮」日本書紀研究会編『日本書紀研究』第30冊、塙書房、249-276
- 古内絵里子2012、「七世紀における大王宮周辺空間の形成と評制」『日本歴史』第770号、日本歴史学会、吉川弘文館、30-45
- 山尾幸久2006、『「大化改新」の史料批判』、塙書房
- 2007、『「大化改新」と前期難波宮』『東アジアの古代文化』133号、大和書房、2-16
- 吉川真司1997、「難波長柄豊碕宮の歴史的位置」大山喬平教授退官記念会編『日本国家の史的特質』古代・中世、思文閣出版、73-98
- 吉田晶1982、『古代の難波』教育社
- 李陽浩2015、「前期難波宮の内裏規模をめぐる一考察」『建築史学』第65号、建築史学会、61-78

Assumption of the Existence of Ancient Remains in the Lower Layer of the Ruins of Osaka Castle Special Historic Site

SATO Takashi

The ruins of the Osaka Castle in the Toyotomi Period (1580–1615) , burnt down in 1615, remain under the ground of the Osaka Castle Special Historic Site (reconstructed in the Tokugawa Period) . And the site of Osaka Hongan-ji (1496–1580) is presumed in lower layer of the Toyotomi's phase.

This article, by investigating pottery of the 5–7 century excavated from the south part of this area, indicates that the area of the Osaka Castle Special Historic Site located in the north end of the Uemachi Upland, the highest place in Osaka City, was developed in the ancient times and the center facilities were constructed in the times of Hoenzaka Warehouses in the 5 th century and Former Naniwa Palace Site in the 7 th century.